

国内研修報告書

私は今回、8月23、24日は輪島で土蔵修復活動をし、25日は金沢駅周辺などで町家を中心にまちづくりの様子を見学した。この研修に参加するきっかけは、友人が声をかけてくれ、金沢の土蔵や町屋に関するDVDを見せてもらったことである。昨年、水野雅男先生の授業で土蔵・町屋のことを知ったのだが、今回改めて映像を見て、調べたことで、実際に行ってみたいという思いが強くなり、参加することに決めた。

・土蔵修復活動

この活動では、能登地震で被害を受けた土蔵を修復している。今回私が訪れたのは、石川県輪島市。一日目は活動場所の片づけ、掃除をしたり、下地に塗るための土を作るなどした。初めて訪れた輪島。とても落ち着いた雰囲気があり、どこか懐かしい、そんなまちだと感じた。倉庫として使われている土蔵を初めて見たのだが、想像していたよりも大きく、広くて力強いという感じがした。二日目には実際に下地塗りをさせていただいた。一日目に左官職人の方々が扉作りをしている様子を見ていたときは、簡単そうに見えたのだが、実際に塗ってみるととても難しい。ヘラに土を取り、壁につけるという動作だけでも、なかなか大変で、壁に塗り広げるときには力の加減がさらに難しい。一定の力で塗っていかないと、壁が平らにならないのである。アメリカから左官職人の方のもとに学びに来ている職人さんからアドバイスをもらいながら、少しずつ上手に塗ることができるようになった。とても貴重な体験をさせていただくことができた。夜には、輪島で開催される「キリコ祭り」に参加した。今までで一番迫力のある祭りであった。キリコというのは切り子灯籠（きりことうろう）の略称で、神輿のお供として祭りに華を添える祭礼大道具である。高さが4～5メートルほどあり、それを地域の人々を中心に担ぎ、町を練り歩く。太鼓の音と笛の音、祭りに参加している人々の掛け声が響き渡り、私自身もとても楽しく、元気づけられるようだった。多くの人々が参加し、賑わっていたキリコ祭りであるが、近年は住民の減少により、キリコの担ぎ手不足が問題となっている。調べてみると、ほかの地域では担ぎ手不足により、やむを得ずキリコに台車をつけて行っているところもあることがわかった。この賑わいはいつまでもなくなってほしくないと思ったし、まちづくりによって少しずつ解決していくべきだと思った。

土蔵、祭りのほかに印象的だったのは、輪島塗の漆器である。小さな商店街を歩くと、漆器を売っているお店がいくつも並んでおり、早朝に並んでいる屋台でも輪島塗が数か所で売られていた。漆器のお店の方にお話を聞かせていただき、お店の中も見せていただいたのだが、本物の輪島塗の商品はとても高い。デリケートな商品でもあるので食器などは長く使っているとダメになってしまうが、本物の輪島塗の漆器ならば直すことができるという。元の色と全く同じ色は作ることができないので、直した部分はわかってしまうが、それもまた魅力の一つだと感じた。輪島塗の商品は、赤や黒を使ったものだけではない。細かく砕いた貝殻を混ぜて塗られたものなどはとても綺麗だった。商品のバリエーションが多いのが印

象的であった。

・町家を使ったまちづくり

研修三日目には輪島を離れ、まず醤油蔵を見学した。大野にある直江屋源兵衛では、醤油蔵を商品販売ブースや、カフェにつくりかえ、営業している。蔵には麹菌が住み着いており、その蔵独特の醤油の味わいを作っているという。醸造設備は近代化されつつあるが、直江屋源兵衛では、麹菌を大切に守り、伝統の味を受け継いでいる。直江屋源兵衛では、醤油といってもさまざまな醤油が売られており、甘めの物、辛めの物、お刺身用、卵かけごはん用などがある。実際に味見をさせていただいたが、どれも全く異なる味で、とても美味しかった。驚いたのは粉末の醤油があったことである。口にふくむと醤油の味が広がり、不思議な感じがした。最近この粉末醤油が注目されているという。例えば天ぷら。液状のものでは天ぷらのサクサク感が損なわれてしまうが、粉末ならばその心配はない。海外からも注文が入るといふ。お目当ての醤油ソフトクリームを食べられなかったのは少し残念だったが、貴重なお話を聞き、蔵の中も見学させていただくことができた。

次に金沢駅に移動。北鉄バスの一日フリー乗車券を購入し、金沢駅周辺を見学した。印象に残っているものは大きく3つある。1つは「HATCHi」というゲストハウス。一見カフェやレストランに見えるおしゃれなゲストハウス。なぜこれが印象的だったかという点、このゲストハウスは築50年の4階建てのビルを“リノベーション”したものである。新しく作るのではなく新しく生まれ変わらせるという方法が私は魅力的だと感じた。部屋は見るができなかったが、パンフレットや口コミサイトを見てみると、心地よさが伝わってくる。次に金沢に来るときは「HATCHi」に泊まりたい。金沢ならではの食材を使った食事の魅力もあった。2つ目はひがし茶屋街。ここは重要伝統的建造物群保存地区に指定されていて、明治初期に建築された茶屋様式の町家が多く残された風情のある街並みが広がっている。ひがし茶屋街は金沢に残る3つの茶屋街の中でも最も規模が大きく、近年では観光スポットとして有名である。ひがし茶屋街につくと、たくさんの人が歩いており、その人気を感じることができた。昔から残る茶屋様式の町家を利用し、カフェやギャラリーなどが立ち並んでいて、落ち着いた雰囲気の中で楽しめるのが魅力だと思った。金沢名物の加賀棒茶はとても美味しく、お土産として購入した。どこのお店の人も優しく、落ち着いていて、とても過ごしやすい空気が茶屋街を満たしているように感じた。また、観光客に優しい仕組みが多くみられた。例えば、茶屋街の中には無料の休憩スペースがある。トイレがあり、その上の階には金沢芸子に関する展示があり、その文化について地元の方が説明してくれるというサービスまで行っていた。また、その休憩所には「まいどさん」といわれる観光ボランティアガイドさんがいる。無料で希望のエリアを案内してくれるという。その歴史は1994年から始まっており、2011年4月の時点で約300人ほどいるが、その70%は60代、70代の人々。金沢市の生涯学習の場「ボランティア大学校」で学び、観光についてのカリキュラムを修了しなければならないという思っていたよりも難しいものであることに驚いた。また、「まちのり」という金沢市が実施しているレンタサイクルサービスがある。一日200円

から借りることができ、市内 21 か所に設置されたサイクルポートに返却できる。料金もリーズナブルでサイクルポートは観光地の近くにあるため、その利用のしやすさが観光客にも好評だという。これらのように観光地として人気を得るための工夫が多く凝らされているのが印象的であった。3つ目は主計町（かずえまち）茶屋街。ひがし茶屋街は観光客で賑わっていたが、この主計町茶屋街は比較的人が少なく、より落ち着いた雰囲気の中で町家を見ることができた。路地裏を歩くとお茶屋からは芸の稽古をする音が聞こえ、川沿いを歩くと旅館があったり、料亭があったりと、まるで京都のような風情のある街並みがある。町家は家によって木材の色が異なり、明るい白っぽいものから、焦げ茶色の重厚感のあるものが並んでいる通りは写真で見るとよりもずっと美しいものであった。